

僕はセメントの土間に出た。

既に別世界だ。

芝に手を引かれ乍ら、裏門をくゞつて井戸の水を飲みたがつた。

苦しくて歩るけない、

魚が陸に引き上げられた時の、魚の激情を想つた。

あぐね果てた。

やつと自家まで歸つた。

鹽の湯で足を拭いたり、顔を洗つたりした。

鏡を見た。髯はのび、頬はコケてゐる。

三十九か四十の人相だと義母が言つた。

それで今夜の九時の上りで、大阪へ行かなければならいとは、

『つらからうが我慢してくれ』と父が言ふ。

『俺の體は何うなるんだ』